

清代八股文における破題・承題の作成法について (7)

滝野邦雄

(v) 『初學採芹集』

すでに検討したように 吳肖元(字は踰龍,号は夢資散人。安徽桐城の人)の『初學採芹集』(乾隆三十八年〔一七七三〕自序)では、破題・承題を書くにあたって、初学者は凡庸で陳腐で軽薄で定式をそのまま踏襲することを最も忌まなければならないし、そもそも、ある部分の定式を、別のところに移しかえてそれが通じるというのだろうか、と述べるのみで詳しい説明はない。

初學の破[題]・承[題]は、最も庸腐(凡庸で陳腐)油滑(軽薄)・寛套を弊襲するを忌む。此れ 彼に移す可しとし、彼 此れ亦た通ず可けんや。此れは、彼 絶えて思いを構さず、終身 毫も作意無きなり……(『初學採芹集』卷首・九葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。ただ、以下のような用例が示されている。

[用例]

題目：孝(學)而時習之(『論語』學而)暗破明承 ●字承法

聖人以孝(學)教天下、兩先示以不息之功焉/夫孝(學)不可不習而習不可不時也、時以習之、其功不已無息乎(聖人 孝(學)を以て天下に教うるに、兩つもて先ず以て息まざるの功を示す/夫れ孝(學)は習わざる可からず、而して習うは時ならざる可からざるなり、時 以て之を習う、其の功 已に息む無からざるかな)

[破題上句:]「孝(學)」字もて章を冒(総括)す。[破題下句:]暗中本。

[承題一句:]●字●●。[承題二句:]順承。[承題三句:]本位を正點す。題意を我(找:補足)す。

頭注：『易』乾卦に「君子以自強不息(君子 以て自強して息まず)」(『初學採芹集』卷首・十六葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目：有朋自遠方來(『論語』學而)暗破明承 反字承法

同類相求、羣賢畢集矣/夫朋難(難)必其來也、況遠方乎、及自遠方來焉、非孝(學)有以致同類之信從乎(同類 相い求め、羣賢 畢集す/夫れ朋 必ず其の來り難(難)し、況んや遠方をや、遠方より來るに及ぶは、孝(學) 以て同類を致すの信從有るに非ざるかな)

[破題上句:] 題面を暗破す。[破題下句:] ●題意。

[承題一句:] 反折字題面。[承題二句:] 本位を正點す。[承題三句:] 上を我(找:補足)し、

以て題意を収む。

頭注：『易』に「同類相來」（『易』に「同類相來」という表現は見当たらないが、『易』（乾卦）に、「同聲相應，同氣相求（同聲 相い應じ，同氣 相い求む）」とある。「蘭亭記（王羲之・「蘭亭序）」に「羣賢畢至少長咸集（羣賢 ^{ことごと}畢く至り，少長 咸な集まる）」と（『初學採芹集』卷首・十六葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：事父母能竭其力（『論語』學而）順破倒承 解字承法

無忝所生者，不以力自私也/夫人子之力皆父母之力也，以父母之力還而竭之父母，非古之純孝哉（所生（父母）を忝むること無き者は，力（誠）を以て自私（自分本位にする）せざるなり/夫れ人子の力は皆な父母の力なり，父母の力を以て還して之を父母に竭す，古の純孝に非ずや）

[破題上句:] 上截を正破す。[破題下句:] 下半を明破す。

[承題一句:] 倒●。[承題二句:] 本位を正す。[承題三句:] ●●。

頭注：『詩』（小雅・小宛）に「無忝爾所生（爾の所生（父母）を忝むること無れ）」。又た『詩』大雅・既醉に「孝子不置（孝子 置きず）」（『初學採芹集』卷首・十六葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目：就有道而正焉（『論語』學而）合破分承 解字●承法

君子以虚受人，於正見之矣/夫有道之人實事與言之準也，君子就而正之，其心抑何虚乎（君子は以て虚にして人を受け，正しきに於いて之を見る/夫れ「有道」の人は實に「事」と「言」^①との準なり，君子 就きて之を正す，其の心 抑そも何れの虚ならんか）

①題目の截去された上文に「敏於事，慎於言（事に敏にして，言に慎しむ）」。

[破題上句:] 題旨を●破す。[破題下句:] 題位に正扣（触れる）す。

[承題一句:] 「道」字を解き，頂上を點し，倒●す可し。[承題二句:] ●●●●。[承題三句:] ●破首。

頭注：『易』（咸卦・卦辭象傳）に「君子以虚受人（君子は以て虚にして人を受く）」。「準」は，法則なり（『初學採芹集』卷首・十六葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

[私が 目睹した『初學採芹集』は，十七葉・十八葉を欠く]

題目：患不知人也（『論語』學而）合破分承 解字正承法

人有所當患者，不在人不知也/夫苟知人則先失其在己矣，此所以可患也，人不己知何計^①

焉（人の當に^{うれ}思ふべき所の者有るも、「人の己を知らざる」に在らざるなり/夫れ^も苟し人を知らざれば則ち先ず其の己に在るを失う、此れ^{うれ}思ふ可き所以なり、「人の己を知らざる」は何れの計（おしはかる）ことあらん）

①『四書集注』論語・學而・「子曰、不患人之不己知、患不知人也」条の朱注に「尹氏曰、君子求在我者、故不患人之不己知……（尹氏 曰く、君子は我に在るを求むる者なり、故に人の己を知らざるを思えず……）」。

[破題上句:] 本位を合破す。[破題下句:] 上を我（找:補足）す。

[承題一句:]先ず本位を反承し、不●上。[承題二句:]「患」字を正承す。[承題三句:]破[題]尾に^{したが}跟いて上を我（找:補足）す。

頭注:「何計」は、何の暇ありて^{かぞ}算えて之に及ぶなり（『初學採芹集』卷首・十九葉・「增訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目:父母惟其疾之憂（『論語』爲政）暗破明承 折字承法

能体親心者、不言孝而孝全矣/夫父母無事不爲子憂也、而惟其疾尤甚、問孝者、可不体親愛子之心乎（能く親の心を体する者は、孝を言わずして孝 全きなり/夫れ父母は[子の]事無きは子の憂と爲さざるなり、而して惟だ其の疾のみ尤も甚しとす、孝を問う者は、親の子を愛するの心を体せざる可けんや）

①『四書集注』論語・爲政・「孟武伯問孝、子曰、父母惟其疾之憂」条の朱注に「……言父母愛子之心無所不至、惟恐其有疾病、常以爲憂也、人子體此而以父母之心爲心、則凡所以守其身者、自不容於謹矣……（……^{いうころ}言は、父母の子を愛するの心 至らざる所無し、惟だ其の疾病有るを恐れ、常に以て憂と爲すなり、人子 此れを體し、父母の心を以て心と爲せば、則ち凡そ其の身を守る所以の者は、自から容に謹しまざるべからざるなり……）」。

[破題上句:] 題意を渾破す。[破題下句:] 上の「問孝」を我（找:補足）す。

[承題一句:]進一層して「惟其」字を剔す。[承題二句:]題面を正点す。[承題三句:]破[題]に應じて題意を醒ます。

頭注:「体」は、^{はりつけ}貼るなり。「尤甚」は、更に甚しきなり（『初學採芹集』卷首・十九葉・「增訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目:温故而知新（『論語』爲政）分破倒承 折字承流水承法

新出於故、求知者所當温也/夫人未有不欲知新者、而抑知不^①外於故乎、則温之可不亟（「新しき」は「^{ふる}故き」より出ず、「知る」を求むる者は當に「^{たず}温ぬ」べき所なり/夫れ人の未だ「新しきを知らん」と欲せざる者有らず、[しかしながら]抑そも「^{ふる}故き」を外にせざるを知るや、[そのようなであるならば]則ち之を「^{たず}温ぬる」も^{しばしば}亟ならざる可し）

①『四書集注』論語・爲政・「子曰、温故而知新、可以爲師矣」条の朱注に「故者、舊所聞（故と

は、舊と聞く所なり)」とあり、胡斐才（字は蓉芝。福建龍門の人。諸生）の『四書撮言大全』（乾隆二十八年（一七六三）刊）は、「聞見之在外者（聞見の外に在る者なり）（『四書撮言大全』論語・卷二・十六葉・「子曰、温故而知新、可以爲師矣」条）と補足説明する。

[破題上句:] 「新」・「故」を合破す。[破題下句:] 「知」・「温」を反破す。

[承題一句:] 下截を倒跌す。[承題二句:] 順点す。[承題三句:] 題意を我（找: 補足）す。
頭注: なし（『初學採芹集』卷首・十九葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 君子不器（『論語』爲政）暗破明分承 解字流水承法

才不窮於用、天下乃有全人矣/夫器固有用之成才也、乃更不窮於用焉、非君子而能化乎器之偏哉（才 [ひとつの] 用に窮まらざるは、天下 乃ち全人有ればなり/夫れ器は固より有用の成才なり、乃ち [君子は] 更に [ひとつの] 用のみに窮まらず、君子にして能く器の偏りに化するに非ざるかな）

[破題上句:] 「不器」を暗破す。[破題下句:] 「君子」を倒我（找: 補足）す。

[承題一句:] 「器」字を承清す。[承題二句:] 「器」字を正点す。[承題三句:] 反別して題意を醒ます。

頭注: 「全人」とは、才徳の兼全なるの人なり（『初學採芹集』卷首・十九葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 学（學）而不思則罔（『論語』爲政）順破逆承 折字兼反字承法

学（學）不可以廢思、爲徒学（學）者指其弊焉/夫学（學）之得心者、必藉於思也、徒学（學）焉則不免於罔矣、奈之何不思耶（「学（學）」以て「思う」を廢す可からず、徒に「学（學）」ぶ者の爲に其の弊を指す/夫れ「学（學）」の心を得る者は、必ず「思う」に藉るなり、徒に「学（學）」べば則ち「罔き」ことを免れず、之を奈何ぞ「思わ」ざらんや）

[破題上句:] 題面を明破す。[破題下句:] 題意を我（找: 補足）す。

[承題一句:] 反承し以て題意を醒ます。[承題二句:] 題位を正点す。[承題三句:] 題神を我（找: 補足）明す。

頭注: 「弊」は、弊病なり。「藉」は、倚頼なり（『初學採芹集』卷首・十九葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 祭如在（『論語』八佾）順破逆承 反字承法

記聖人之祭先祖^①、事亡如事存焉^②/夫先祖之不在也久矣、乃祭之者犹（猶）是一体之分也、則先祖以祭者在也、不如見先祖耶（聖人の先祖を祭るを記すに、亡（葬られてからのこと）に事うること存（存在しているかのよう）に事うるが如くす/夫れ先祖の在^{いま}さざるや久し、[しかし] 乃ち之を祭る者は犹（猶）お是れ一体の分のごとくするなり、[そのようにすれば]

則ち先祖の以て祭られし者は在すなり、先祖に見ゆるに如かざらんや)

①『四書集注』論語・八佾・「祭如在」条の朱注に「程子曰、祭、祭先祖……（程子曰く、祭とは、先祖を祭るなり……）」。

②『中庸』第十九章第五節に「事亡如事存（宗廟の祭祀において）亡（葬られてからのこと）に事うる事存〔存在しているかのよう〕に事うるが如くす」。

[破題上句:]「祭」字を破清す。[破題下句:]「在」字を暗破す。

[承題一句:]「在」字を反別す。[承題二句:]●●●●。●●●●。[承題三句:]題面を我(找:補足) 還(還)す。

頭注:「一体之分」は、是れ祖考の一身の分より来る（『初學採芹集』卷首・十九葉～二十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 與其媚於奧（『論語』八佾）順破倒承 解字承法

有恍然於媚之術者、而奧不可恃矣/夫奧之獨擅其媚也久矣、以世無有恍然於媚之術者耳、奧何不幸而爲其所揣也（「媚びる」の術に恍然たる者有りて、「奧」 恃む可からずとす/夫れ「奧」の獨り其の「媚」を擅にするや久し、[しかしそれは] 世の「媚びる」の術に恍然たる者無きを以てのみ、「奧」 何ぞ不幸にして [「竈」とも喩えとしてとして持ち出され] 其の 揣る所と爲らん)

[破題上句:] ●全神、「媚」字を破く。[破題下句:] 「奧」字を破く。●●●●。

[承題一句:] 「媚」・「奧」を明承す。[承題二句:] 「與其」の神を暗承す。[承題三句:] 下を倒影し、本位を動かす。

頭注:「揣」は、揣度なり（『初學採芹集』卷首・二十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 臣事君以忠（『論語』八佾）暗破明承 解字承法

克盡厥心、以事一人而已/夫忠固事君之極也、苟不以忠、臣道寧無愧乎（克く厥の心を盡し、以て一人に事うるのみ/夫れ忠は固より君に事うるの極なり、苟し忠を以てせずば、臣道寧に愧ずること無けんや)

[破題上句:] 「忠」字を暗破す。[破題下句:] 「事君」を倒破す。

[承題一句:] 正面を倒承す。[承題二句:] 「以忠」を反別す。[承題三句:] 題意を反收す。

頭注:『詩』（魯頌・泂水）に「克廣德心（克く徳心を廣む）」。又た『詩』大雅・烝民に「以事一人（以て一人に事う）」（『初學採芹集』卷首・二十葉・「増訂採芹捷訣破承題法」条）。

題目: 管氏亦有反坫（『論語』八佾）渾破明承 反喝承法

霸佐之燕、等於邦君矣/夫反坫豈管氏所宜有哉、乃亦有之、不幾與邦君等燕耶（霸佐（管仲の代字）の燕、邦君に等し/夫れ反坫は豈に管氏の宜しく有るべき所ならんや、乃ち亦た之

れ有り、邦君と燕を等しくするに幾さかもりからざらんやちか

①『四書集注』論語・八佾・「管氏亦有反坫」条の朱注に「坫、在兩楹之間、獻酬飲畢、則反爵於其上、此皆諸侯之禮、而管仲僭之、不知禮也（坫は、兩楹の間に在り、獻酬し飲み畢れば、則ち爵を其の上にかえ反す。此れ皆な諸侯の禮なり、而して管仲 之になぞら僭えるは、禮を知らざるなり）」。

[破題上句:] 「管氏」を暗破す。[破題下句:] 下截を暗破し、上を抱く。

[承題一句:] 題意なり。[承題二句:] 本位を正点す。[承題三句:] 題意を我(找: 補足)明す。

頭注: 「伯(覇)佐」は、齊の桓[公] 伯(覇)を創め、管仲 之を佐くなり。「等」は、之と一様同等なり(『初學採芹集』卷首・二十葉・「增訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 父母在不遠遊(『論語』里仁) 正破反承 反字承法

計及於親在、爲遊子之心計焉①。夫親在而遠遊者何紛紛也、子以不遠遊箴之、遊子尚其勿與親離哉(計りて親の在るに及ぶ、遊子の心の爲に計れり/夫れ親 在りて遠遊する者は何ぞ紛紛(多い)たらん、子は遠遊せざるを以て之を箴いましめとす、[そうなれば] 遊子 尚お[やはり] 其れ親と離れること勿らんか)

①古詩十九首の「行行重行行」に「浮雲蔽白日、遊子不顧反(浮雲 白日を蔽い、遊子 顧反せず)」。

[破題上句:] 上半を順破す。[破題下句:] 下截を破き、題意を透す。

[承題一句:] 反別し、題を醒ます。[承題二句:] 本位を正轉す。[承題三句:] 題意を我(找: 補足)醒す。

頭注: 「心計」は、●●●●●●●●。「紛紛」は、多きなり。「箴」は、箴規勸(勸)戒なり(『初學採芹集』卷首・二十葉・「增訂採芹捷訣破承題法」条)。

題目: 父母之年 二句(『論語』里仁) 倒破順承 折字承法

能知親年者、斯知親矣。夫年在父母而不知焉可乎、不知父母之年是不知父母矣、烏有孝子而出此耶(能く親の年を知る者は、斯れ親を知るなり/夫れ年の父母に在りて知らざるは、焉ぞ可なるや、父母の年を知らざるは是れ父母を知らざるなり、烏あに孝子にして此れより出るもの有らんや)

[破題上句:] 題面を合破す。[破題下句:] 題意を我(找: 補足)清す。

[承題一句:] 先ず題意を喝醒す。[承題二句:] 本位を正点す。[承題三句:] 題神を我(找: 補足)足す。

頭注: 「烏有」は、豈有(豈に有らん)なり(『初學採芹集』卷首・二十葉・「增訂採芹捷訣破承題法」条)。

(VI) 『初學文法入門醒』

同治六年(一八六七)重鐫の『初學文法入門醒』は、承題をつぎのように説明する。

〔承題〕

承題とは、破題の意を承け明らかにするなり。正破ならば則ち反承、反破ならば則ち正承、順破ならば則ち逆承、逆破ならば則ち順承、分破ならば則ち合承、合破ならば則ち分承なり。数句に過ぎずと雖も、之を總じて他を題前・題面・題後の三層に還すを要す。其の第一句は或いは道理を泛論（『斯文規範』卷之六・十八葉・「一日泛論」条）す、或いは一句を虚領す、或いは題字を挑剔（掘り出す）す、或いは題意を翻起（蒸し返す）す。總じて題前に在りて立論するを要す。第二句は則ち正に題面を還す。第三句は或いは上文に繳る、或いは章旨に歸す、或いは本題を收足す、或いは下意を採取し、以て之を起動す。且つ第一句は、尤も題の境界の處なれば、定めて本題より説き起こすを要す。即ち上文を撇い難き者有れば、亦た須らく本題より上文に倒入すべし、[そうすれば]方に題位をして劃然たらしむ。然らざれば則ち上と牽連 清からず。末句に至るに亦た題の正意を將つて此の處に收住する者有り。俱に當に相題して之を爲すべし。之を總ずるに破題と並頭・並脚す可からず。而して又た句句は破題と相い應ずるを要す。長題の逐句（句ごとに）承出する能わざるが若きは、則ち宜しく關切重大なる者を選びて、之を籠括すべし、[そうして]清醒快切なるを以て主と爲すを要す。一つも糲糊・懈弛なる語に着す可からず（『初學文法入門醒』・講題・一葉～二葉・「承題」条）。

①『斯文規範』に「挑は、反挑なり。剔は、解骨なり。二字は合わせ看る。總じて是れ字面の未だ出ざるの先に於いて反筆を用いて之を挑剔し、其の字面をして醒豁せしむるを言うなり」（『斯文規範』卷之六・十六葉・「一日挑剔」条）。

承題は、破題の意味を承けて明らかにするものである。破題が正破であれば反承とし、反破であれば正承とし、順破であれば逆承とし、逆破であれば順承とし、分破であれば合承とし、合破であれば分承とする。承題は数句にすぎないものではあるが、すべてこうしたことを題前・題面・題後の三段にかえすことが必要である。承題の第一句は全体の道筋をひろく説いたり、或いは仮に句を受けたり、或いは題字を挑剔（掘り出す）したり、或いは題意を翻起（蒸し返す）したりする。すべて承題の第一句では立論することが必要である。第二句では則ち正しく題面をもどす。第三句では或いは上文に繳ったり、或いは章旨に歸ってみたり、或いは本題を収めて補足したり、或いは下意を探り取ってそれを気付かせたりする。そのうえ、承題の第一句目は、題目の範囲を示すところにあたるので、題目の主題から説き始める。もしも、題目となっていない題目より上の部分を切り離しにくければ、主題にもとづいてその上の部分に言及すべきである。そうすれば、題位（題目で要求されている内容）の区分をはっきりさせることができる。そうでなければ、截去された上文に引かかってしまい、はっきりしなくなってしまう。末句になると題目のきちんとした内容でもって此のを収める形式のものがある。すべて題目を見てこれをおこなうべきである。要するに破題と承題とは並頭・並脚すべきではないのである。しかし、句句ごとに呼応することも必要である。出題された題目が長く、各々の句で受け出す

ことができなければ、最も関係の深い要点を選びだしてそれでまとめるべきである。明確で歯切れのよいものを主なものとする。曖昧でだらだとした表現をすべきではない、という。

[用例]

題目：學而時習之（『論語』學而）

學以時習爲貴，聖人所以勉人者深矣／蓋學而不習猶弗學也，然非時習，又何以言學乎，夫子故爲人勉之（學「時に習う」を以て貴しと爲す，聖人の人に勉むる所以の者は深し／蓋し學びて習わざれば猶お學ばざるがごときなり，然れども「時に習う」に非ざれば，又た何を以て「學ぶ」と言うや，夫子 故に人の爲に之を勉む）

此れ正破・反承法なり。蓋し題の層次有る者は，破題 盡く析（分析）する能わず。[そこで] 承題 須らく當に細かく之を還すべし。特に反・正 同じからざるのみならず（『初學文法入門醒』破承・一葉・「學而時習之」条）。

題目：君子食無求飽（『論語』學而）

無暇求飽者，志不在食也／夫食亦何妨於飽乎，而求飽者多矣，君子則無求焉，志豈在食哉（飽くを求めぬに暇無き者は，志 食に在らざればなり／夫れ食は亦た何ぞ飽くに妨げあらんや，而して飽くを求むる者多し，君子は則ち [飽くを] 求むる無し，志は豈に食に在らんや）

①『四書集注』論語・學而・「君子食無求飽」条の朱注に「不求安飽者，志有在，而不暇及也（安・飽を求めざる者は，志の [別に] 在る有りて，[安・飽に] 及ぶ暇あらざるなり）」。

承題は，一反・一正・一收に外ならず。總じて三層を以て正格と爲す。此れを觀て以て類推す可し（『初學文法入門醒』破承・一葉・「君子食無求飽」条）。

題目：視其所以（『論語』爲政學而）

於所以而先視之，其大端已見矣／夫人莫不有所以也，從而先視之，其大端不已見哉（以す所に於いて先ず之を視れば，其の大端 已に見ゆ／夫れ人 以す所有らざるは莫きなり，従いて先ず之を視る，其の大端 已に見えざらんや）

凡そ題は排句の首に属する者なり。破 [題]・承 [題] は俱に下文を照定し，本句を切定するを要す。破 [題]・承 [題] の「先」字・「已」字の如きは，其の移易する可からざるの處を正す（『初學文法入門醒』破承・一葉・「視其所以」条）。

題目：君子周急不繼富（『論語』雍也）

君子用財有道，各適其宜而已／夫急而不周，富而反繼^①，非宜也，求亦嘗聞教於君子乎（君子財を用いるに道有り，各々其の宜しきに適（かな）うのみ／夫れ急にして周^すわず，富みて反つて繼ぐ（さらに与える），宜しきに非ざるなり，求（冉有，名は求）亦た嘗て教を君子に聞

くか)

①『四書集注』論語・雍也・「君子周急不繼富」条の朱注に「急、窮迫也。周者、補不足。繼者、續有餘（急は、窮迫（貧窮）なり。周とは、足らざるを補う。繼とは、餘有るを續ぐ）」。

此れ正破・反承法なり。又た暗破・明承法なり。破〔題〕中に未だ題字を見ざれば、承題自ずから當に明點すべし。然れども正點すれば則ち呆（ぼんやりする）なり。此れ題の實字に於いては、俱に反面點過に在り。正意は俱に末句に在りて虚收す。化●して活を爲す可し（『初學文法入門醒』破承・一葉～二葉・「君子周急不繼富」条）。

題目：與之粟九百（『論語』雍也）

九百之粟雖多，而以與宰則當矣／夫粟而九百，非不多也，而以與思正與宰耳，豈不富乎（九百の粟 多しと雖も，而れども宰（代官）に與うを以てすれば則ち當えり／夫れ粟にして九百，多からざるに非ざるなり，而して以て思（原思，名は憲）に與うるは正に宰〔となった給与として〕與うるのみ，豈に當わざらんや）

破承は只だ「與宰（宰（代官）に與う）」の意を將つて補清す。則ち下は當に辭意 自から見わすべからず。凡そ題眼の属する所は俱に當に緊照すべきなり（『初學文法入門醒』破承・二葉・「與之粟九百」条）。

題目：犁牛之子（『論語』雍也）

牛而犁也，似難乎其爲子矣／蓋其子既出於犁牛，得不謂之犁牛之子乎，而豈能忘其所從出乎（牛にして犁なり，其の子爲り難きに似たり／蓋し其の子 既に犁牛に出ず，之を犁牛の子と謂わざるを得ん，而して豈れ能く其の従り出る所を忘れんか）

此の題の下文を関わり動かす處は，一つの「之」字に在り。然れども下文 起こせば則ち趣無し，反吸すれば則ち情有り，又た本題の字字を將つて拆開し一看すれば，其の情趣自から出づ（『初學文法入門醒』破承・二葉・「犁牛之子」条）。

題目：舉一隅（『論語』述而）

有所舉以示其端，即一隅非少也／夫以一隅，似甚少矣，然既有以舉之，豈言一則一，言隅則隅也乎（舉ぐる所有りて以て其の端を示す，即ち一隅は少きに非ざるなり／夫れ一隅を以てするは，甚だ少なきに似たり，然れども既に以て之を舉ぐる有り，豈に「一」を言えば則ち「一」，「隅」を言えば則ち「隅」ならんや）

題は係れ関わり動かす者なり。立説は須らく下文に関わり照すべし。[そうすれば]方に露活を見る。若し「一隅」の一字を呆看（ぼんやりとながめる）すれば，則ち味無し（『初學文法入門醒』破承・二葉・「舉一隅」条）。

題目：女爲君子儒（『論語』雍也）

聖人爲賢者正儒統，而勉其慎所爲焉／蓋謂之儒，非君子不足以當之，而謂之君子儒則爲儒者不盡皆君子也，子夏可不慎所爲乎（聖人（孔子）賢者（子夏）の爲に儒統を正し，而して其の爲す所を慎むに勉めしむ／蓋し之を「儒」と謂うは，「君子」は以て之に當てるに足らざるに非ず，而して之を「君子儒」と謂えるは則ち儒と爲る者は盡くは皆な君子ならざればなり，子夏 爲す所を慎まざる可けんや）

此の題は須らく下文を記定すべし。「女爲」二字は方^{まさ}に力^{つく}を着す（盡力）す（『初學文法入門醒』破承・二葉～三葉・「女爲君子儒」条）。

題目：樂亦在其中矣（『論語』述而）

聖心無往不樂，有即貧而寓者焉／夫樂有所在，即有所不在矣，曰亦在其中，聖心安往不樂哉（聖心 往くとして樂しまざる無ければ，即ち貧にして寓する者有り／夫れ樂しみは在る所に有り，即ち在らざる所にも有り，「[樂しみ] 亦た其の中に在り」と曰う，聖心 安くに往きて樂しまざらんや）

「亦」とは，彼に在り，亦た此に在^{いい}の謂なり。須らく此の如く看れば方^{まさ}に解を得（『初學文法入門醒』破承・三葉・「樂亦在其中矣」条）。

題目：擇其善者而從之（『論語』述而）

擇善而從，師已在其善矣／夫三人未必皆善，而善者不可不從，擇而從之，師不已在於善哉（善を擇びて從う，師 已に其の善に在ればなり／夫れ三人は未だ必ずしも皆な善ならず，而して善なる者は從わざる可からず，擇びて之に從う，師 已に善に在らざらんや）

① 截去された上文に「子曰，三人行，必有我師焉（子 曰く，三人 行えば，必ず我が師有り）」。

上文は是れ綱なり。題と下句とは是れ目なり。故に破 [題]・承 [題] は須らく「師」字を顧みるべし。「擇」字は又た下句を包む。故に承 [題の] 首は先ず下文を冒（統括）す（『初學文法入門醒』破承・三葉・「擇其善者而從之」条）。

題目：互鄉難與言（『論語』述而）

鄉稱難與言^①，宜無人可言矣／夫天下豈有不可與言之鄉乎，而惟互鄉則稱難也，其又何人難也哉（鄉 「與に [善を] 言い難し」と稱するも，宜しく人の言う可きもの無かるべきや／夫れ天下 豈に與に [善を] 言う可からざるの郷有らんか，而して惟だ「互郷」のみ則ち「[善を] 言い 難し」と稱するなり，其れ又た何人の「難」からざらんや）

① 『四書集注』論語・述而・「互郷難與言」条の朱注に「互郷，郷名。其人習於不善，難與言善……（互郷は，郷の名なり。其の人不善を習い，與に善を言い難し……）」。

題と下文とは反對を作す。破 [題]・承 [題] は只だ本題に就きて托住す。下意 敲かざ

るも自から動く（『初學文法入門醒』破承・三葉・「互郷難與言」条）。

題目：論篤是與（『論語』先進）

取人以言，亦徒見其論之篤而已^①／夫論何可不篤，論篤何遂不可與而惟是之與也，即烏知篤者乃其論也哉（人を取るに言を以てすれば，亦た徒だ其の論の篤なるを見るのみ／夫れ論何ぞ篤ならざる可けん，「論篤（論篤なる）」は何ぞ遂に與す可からざらん，而して惟だ是れ之れ與せば，即ち烏んぞ篤なる者は乃ち其の論なるを知らざらんや）

①『四書集注』論語・先進・「論篤是與」条の朱注に「言但以其言論篤實，而與之，則未知其爲君子者乎，爲色莊者乎。言不可以言取人也（言は但だ其の言論の篤實なるを以て之に與せば，則ち未だ其の君子者爲るか，色莊者爲るかを知らず。言を以て人を取る可からざるを言うなり）」。

承題は拘一層法を用い翻を作す。但だ題義のみ襯（際立たせる）して圓にして跌するを得るのみならず，轉處も更易し目を醒ます。且つ下意も亦た俱に打動す。○題は一の「是」字に在るを要む。務めて須らく點醒すべし（『初學文法入門醒』破承・三葉～四葉・「論篤是與」条）。

題目：請學爲圃（『論語』子路）

賢者復以學圃請，猶然學稼之見也／夫圃而可學，稼亦可學矣，遲而復以此請也，不猶然學稼之見乎（賢者（樊遲）復た圃を學ぶを以て請う，猶然（依然として）と「稼を學ぶ」の見[解]あればなり／夫れ圃にして學ぶ可きなれば，稼も亦た學ぶ可きなり，[樊]遲にして復た此れを以て請う，猶然（依然として）と「稼を學ぶ」の見[解]ならざらんや）

此れ上に借りて陪法を作す。題貌は上句と一例（列）なりと雖も，題情は却って上と同じからず。此の如く借り來りて陪して説くは，但だ移して上句を得るのみならず，更に許多の遠神（深遠な神韻）有り（『初學文法入門醒』破承・四葉・「請學爲圃」条）。

題目：君子病無能焉（『論語』衛靈公）

深於爲己者，時以無能爲病焉／夫君子未必遂無能也，而所病在此，非深於爲己者乎（己の爲にするに深き者は，時々「能くすること無き」を以て病うと爲す／夫れ君子未だ必ずしも「能くすること無き」を遂げざるなり，而して病うる所は此に在り，己の爲にするに深き者ならざらんや）

文章 襯（際立たせる）より妙なるは莫し。承題の首句は襯（際立たせる）し得て圓なり，次句の「病」字は便ち點し得て醒む。且つ先に「無能（能くすること無き）」を提し，再び「病」字を煞す。乃ち一定の法なり（『初學文法入門醒』破承・四葉・「君子病無能焉」条）。

題目：遠者來（『論語』子路）

民來自遠，有來之者也/夫遠方之民，豈易爲我來乎，而竟來焉，君子曰，是必有來之者也（民遠きより來るは，之に來る者有ればなり/夫れ遠方の民，豈に我が爲の來り易きや，而して竟に來る，君子 曰く，是れ必ず之に來る者有ればなりと）

此れ●●●●。題に就きて情を生ずるの法なり。●●●●，●●●●●字●●●●更趣（『初學文法入門醒』破承・四葉・「遠者來」条）。

(vii) 『夢雲軒管見録』

浙江山陰の張商霖の同治十年（一八七一）刊『夢雲軒管見録』（各頁の柱と封面書名とは『雲路指南』とする）は、承題についてつぎのように解説する。

[承題法]

承題とは、破題の未だ盡さざるの意を承けて之を發明するなり。其の格 三四句を以て止むと爲す。六句に至れば則ち太はだ長し。最も明快（明確）・斬截（はっきりする）なるを要す。首句は是れ題の界限（範圍）なれば，須らく本題より説き起こすべし。卽し上文を撇し難き者有れば，亦た須らく先ず本題を承けて上文に倒入すべし。且つ承題と破題とは必ず當に應ずべし。[それは] 正破なれば則ち反承，反破なれば則ち正承，順破なれば則ち逆承，逆破なれば則ち順承，分破なれば則ち合承，合破なれば則ち分承の如くす。盡くは拘わらずと雖も，然れども初學は總じて此の如くするを以て妥と爲す。最も忌く所の者は，領頭（あたま）の數字と破題の領頭の數字とを相い同じくする，之を「並頭」と謂う。煞尾（末尾）の數字と破題の煞尾の數字とを相い同じくする，之を「並脚」と謂う。切に戒め犯すこと勿れ。承題の起首の虚字は，宜しく「夫」字・「蓋」字を用うべし。「若」・「甚矣」は，用いる可しと雖も，却って習見せず。末句の住脚に至れば，多く「耶」・「歟」・「乎」・「哉」等の字を用う。其れ「矣」・「也」・「焉」・「耳」等の字は，亦た之を用うること有り。間に「云」字・「之」字・「如此」字を用いる有り。皆な正格なり。若し語を歇めず徑ちに往く，或いは歇語を用いず，一二句もて起講に接入す，或いは末を承けて忽ち大議を發し，數長句を用いて起講に接入すは，皆な變格なり。稱呼に至りては，竟に直言す可し。「孔子」の如きは則ち直ちに「夫子」と稱し，「堯」・「舜」は則ち直ちに「堯」・「舜」と稱す。其餘の諸人及び物は皆な題に依りて直ちに之を稱す（『夢雲軒管見録』卷五・四葉～五葉・逐字句坪・「承題法」条）。

承題は、破題で説きつくせないところを説明する部分である。形式は、三四句で止める。六句になればたいへん長くなってしまふ。書き方は明確ではっきりしていることが必要である。承題の第一句目は、題目の範圍を示すところにあたるので、題目の主題から説き始める。もしも題目となっていない題目より上の部分を切り離しにくければ、主題にもとづいてその上の部分に言及すべきである。そのうえ、破題と承題とはおたがいに呼応しなければならぬ。それは、破題が正破であれば反承を用い、反破であれば正承を用い、順破であれば逆承を用い、逆破で

あれば順承を用い、分破であれば合承を用い、合破であれば分承を用いるようにすることである。ただし、すべてそのようにしなければならないというわけではない。しかし、初学者は総じてこのようにするのがよい。最も避けなければならないのは、承題の第一句目の最初のいくつかの文字と破題の第一句目の最初のいくつかの文字とを同じものにしてしまうことである。これを「平頭」という。また、末句のいくつかの文字と破題の末句のいくつかの文字とを同じものにしてしまうこともいけない。これを「平脚」という。ほんとうに戒めたいのでこうしたものを書いてはいけない。承題の第一句目の頭の虚字には、「夫」字・「盖」字を用いるべきである。「若」字・「甚矣」字は、用いることができるが、常に見るものではない。末句の最後には「耶」・「歟」・「乎」・「哉」等の字を用いることが多い。「矣」・「也」・「焉」・「耳」等の字は、また用いることもある。時には「云」字・「之」字・「如此」字を用いることもある。これらはすべて標準的なものである。屈折させずに直線的に文を書いたり、虚字を用いなかったり、一二句で承題を書きそのままつぎの起講につなげたりするのは、普通とは異なった形式となる。固有名詞については、そのまま表現するべきである。孔子は「夫子」といい、「堯」・「舜」はそのまま「堯」・「舜」とする。その他の人物・物品などは題目のいい方にしたがって書く、という。

なお、『夢雲軒管見録』では用例はあげられてはいない。

(viii) 『童子問路』

『童子問路』には承題についての解説はなく、以下のような用例のみが示されている。

[用例]

題目：孝（學）而時習之（『論語』學而）

聖人以孝（學）教天下，兩先示以不息之功焉／夫孝（學）不可不習而習不可不時也，時以習之，其功不已無息乎（聖人 孝（學）を以て天下に教うるに、兩つもて先ず以て息まざるの功を示す／夫れ孝（學）は習わざる可からず、而して習うは時ならざる可からざるなり、時 以て之を習う、其の功 已に息む無からざるかな）

[破題上句:]「孝（學）」字を順破す。通章を冒（包容、統括）す。[破題下句:]本題を暗扣（暗に触れる）す。

[承題一句:]字を折（分析）し別清す。[承題二句:]順承なり。[承題三句:]本位を正点する。題を我（找：補足）す（『童子問路』卷一・十六葉・「承題」条）。

題目：人不知而不愠（『論語』學而）

學非求名，不必愠人之不知也／夫不知而愠者恒多也，而不愠焉，豈於在人者而求之乎（學は名を求めるに非ざれば、必ずしも人の知らざるを愠らざるなり／夫れ知らずして愠る者は恒

に多し、而して愠らず、豈に人に在る者に於いて之を求めんや)

①『四書集注』論語・学而・「子曰学而時習之」条の朱注に「尹氏曰、學在己。知不知在人。何愠之有(尹氏曰く、學は己に在り。知る知らざるは人に在り。何の愠ること之れ有らん)」。

[破題上句:] 題意なり。[破題下句:] 題面を破く。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 正面なり。[承題三句:] 破[題]に應じて收む^①(『童子問路』卷一・十六葉・「承題」条)。

①收:『斯文規範』に「收は、^{おさめる}歛なり」(『斯文規範』卷之六・二十葉・「一日反收」条)。

題目:有朋自遠方來(『論語』学而)

同類相求、羣賢畢集矣/夫朋難(難)必其來也、況遠方乎、及自遠方來焉、非孝(學)有以致同類之信從乎(同類 相い求め、羣賢 畢集す/夫れ朋 必ず其の來り難(難)し、況んや遠方をや、遠方より來るに及ぶは、孝(學) 以て同類を致すの信從有るに非ざるかな)

[破題上句:] 題面を暗破す。[破題下句:] 題意を我(找:補足)す。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 本位を正点す。[承題三句:] 上を我(找:補足)し以て題意を收む(『童子問路』卷一・十六葉・「承題」条)。

題目:其爲人也孝悌(『論語』学而)

賢者重孝悌、而思夫克盡^①之人焉/夫孝悌人之大端也、能孝悌焉、豈有愧於爲人乎(賢者 孝悌を重んじ、夫の克盡の人を思う/夫れ孝悌は人の大端なり、能く孝悌なり、豈に人と爲り愧ずること有らんや)

①『四書集注』論語・顔淵・「顔淵問仁。子曰克己復禮爲仁」条の朱注に「程子曰、非禮處、便是私意、既是私意、如何得仁、須是克盡己私、皆歸於禮、方始是仁(程子曰く、非禮の處、便ち是れ私意なり、既にはれ私意なれば、如何ぞ仁を得ん、須らく是れ己私を克盡し、皆な禮に歸すべし、[そうすれば]方めて始めて是れ仁なり)」。

[破題上句:] 全旨を冒(包容、統括)す。[破題下句:] 題の「也」字の神を起こす。

[承題一句:] 先ず「孝悌」を剔す。[承題二句:] 正点す。[承題三句:] 次に「爲人」を收む(『童子問路』卷一・十六葉・「承題」条)。

題目:弟子(『論語』学而)

聖人念弟子、當顧名而思義焉/夫弟子必有弟子之事也、既爲弟子、而可不安于弟子乎(聖人 弟子を念うに、當に「名を顧みて義を思う」(『三國志』魏志・王昶傳)べし/夫れ弟子は必ず弟子の事有り、既に弟子と爲る、而して弟子に安んぜざる可けんや)

[破題上句:] 題面なり。[破題下句:] 下意を虚含す。

[承題一句:] 下を冒(包容、統括)す。[承題二句:] なし。[承題三句:] 下文を反点す(『童

子問路』卷一・十六葉・「承題」条)。

題目：事父母能竭其力（『論語』學而）

無忝所生^①者，不以力自私也/夫人子之力皆父母之力也，以父母之力還而竭之父母，非古之純孝哉（所生（父母）を忝むること無き者は，力（誠）を以て自私（自分本位にする）せざるなり/夫れ人子の力は皆な父母の力なり，父母の力を以て還して之を父母に竭す，古の純孝に非ずや）

①『詩』（小雅・小宛）に「無忝爾所生（爾の所生（父母）を忝むること無れ）」。

[破題上句:] 上截を暗破す。[破題下句:] 下半を明破す。

[承題一句:] 「力」字を倒解し，「其」字を別醒す。[承題二句:] 本位を正轉す。[承題三句:] 題意を破き，下を●す（『童子問路』卷一・十六葉～十七葉・「承題」条）。

題目：子奚不為政（『論語』）

不知聖人之心者，妄以為政相疑焉/夫孔子之不為政有自來矣，乃或人則未之知也，此其所以有為政之疑與（聖人の心を知らざる者は，妄りに政を為すを以て相い疑う/夫れ孔子の政を為さざるは自から來る有り，乃ち或人は則ち未だ之れ知らざるなり，此れ其の政を為すの疑い有る所以なるか）

[破題上句:] なし。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし（『童子問路』卷一・十七葉・「承題」条）。

題目：臣事君以忠（『論語』八佾）

克盡厥心，以事一人而已/夫忠固事君之極也，苟不以忠，臣道寧無愧乎（克く厥の心を盡し，以て一人に事うるのみ/夫れ忠は固より君に事うるの極なり，苟し忠を以てせずんば，臣道寧に愧ずること無けんや）

[破題上句:] 「忠」字を破く。[破題下句:] 「事君」を倒破す。

[承題一句:] 正面を倒承す。[承題二句:] 反別す。[承題三句:] 反題す（『童子問路』卷一・十七葉・「承題」条）。

題目：必有隣（『論語』里仁）

隣可必有，德宜修矣/夫隣似難（難）決其有也，然有可必者惟德耳，第（第）患無德，寧患無隣哉（隣 必ず有る可し，德 宜しく修むべし/夫れ隣 其の〔徳が〕有るを決し難（難）きに似たるなり，然れども必ずす可き者有り，〔それは〕惟だ徳なるのみ，〔自分は〕第（第）だ徳無きを患うのみ，寧ぞ隣無きを患えんや）

[破題上句:] 題面を暗破く。[破題下句:] 題意を含み我(找:補足)す。

[承題一句:] 反承す。[承題二句:] 本題を正点す。[承題三句:] 上を我(找:補足)し以て題意を収む(『童子問路』卷一・十七葉・「承題」条)。

題目: 狂簡(『論語』公冶長)

志之大者^①, 小者所不拘也/盖狂惟志其大而已, 狂豈有不簡者乎, 吾黨有此, 如之何勿思(志の大なる者は, 小なる者の拘まざる所なり/盖し狂は惟れ志 其れ大なるのみ, 狂は豈に簡ならざる者有らんや, 吾黨 此れ有り, 之を如何ぞ思うこと勿けん)

①『四書集注』論語・公冶長・「吾黨小子, 狂簡」条の朱注に「狂簡, 志大而略於事也(狂簡は, 志大にして, 事に[疎]略なり)」。

[破題上句:] 「狂」を破く。[破題下句:] 「簡」を破く。

[承題一句:] なし。[承題二句:] 「狂簡」二字もて連なり看るは極めて是なり。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十七葉・「承題」条)。

題目: 匿怨而友其人(『論語』公冶長)

怨而友也, 工於匿矣/夫怨以為友, 則方其友之之時, 正其怨之日也, 其匿者尚可測哉(怨みて友たるは, 匿すことに工みなり/夫れ怨みて以て友と為れば, 則ち方に其の之を友とするの時は, 正に其の之を怨むの日なり, 其れ匿す者は尚お[こうしたことを]測る可きかな)

[破題上句:] なし。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] ●題。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十七葉・「承題」条)。

題目: 女爲君子儒(『論語』雍也)

儒有所當為者, 勉為君子而已/夫儒一也, 而獨有以君子名者, 安可不正其所為哉(儒の當に為すべき所有者は, 勉めて君子と為るのみ/夫れ儒は一なり, 而して獨り君子を以て名づくる者有り, 安んぞ其の為す所を正さざる可けんや)

[破題上句:] なし。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十七葉・「承題」条)。

題目: 非不說子之道(『論語』雍也)

以說道為詞者, 若有自解之意焉/夫使果說子之道, 亦何必明其為說哉, 非不云者, 殆欲以自解乎(道を説ぶを以て詞と為す者は, 自から之を解するの意有るが若し/夫れ子の道を説ぶを果たさしむれば, 亦た何ぞ必ず説びと為すを明らかにせんや, 云わざるに非ざる者は, 殆

んど以て自から解かんと欲せんとするか)

[破題上句:] 本面なり。[破題下句:] 「非不」を暗破し、下の「力不足」意を含む。

[承題一句:] 翻入す。[承題二句:] 正位なり。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十八葉・「承題」条)。

題目: 可以語上也(『論語』雍也)

上之可語, 亦可於其人也/夫上必視乎其人而語之也, 中人以上以上為語, 不亦可乎(上の語ぐ可きは, 亦た其の人に於いて可なり/夫れ上は必ず其の人を視て之を語ぐるなり, 「中人以上」とは「以上」もて語ぐと為す, 亦た可ならずや)

[破題上句:] 本題なり。[破題下句:] 上を我(找: 補足)す。

[承題一句:] 下を案ず。[承題二句:] 題を我(找: 補足)す。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十八葉・「承題」条)。

題目: 雖執鞭之士(『論語』述而)

士有所欲求, 不必問其為何如士矣/夫所貴乎士者以其不求富也, 不然執鞭也耶, 有是士也耶(士求めんと欲する所有り, 必ずしも其の何如なる士と為るかを問わず/夫れ士より貴とき所の者は以て其の富を求めざるなり, 然らざれば執鞭なるか, 是の士有るか)

①也耶: 「音 長く, 意 婉なり。文の拖●する處に之を用う。情の悽感(悲憤感傷)する處にも亦た之を用う」(『舉業辨字』歇語辭第七・三十七葉・「也耶」条)。

[破題上句:] 倒破にして上を抱く。[破題下句:] 「執鞭」意を暗破す。

[承題一句:] 重ねて「士」字を見て, 反って上意を抱く。[承題二句:] なし。[承題三句:] 正轉虚掉し以て題神を取る(『童子問路』卷一・十八葉・「承題」条)。

題目: 樂以忘憂(『論語』述而)

樂之真者, 憂自泯也/夫樂惟不真, 斯憂從中矣, 若憤極而樂之, 夫子憂, 又云胡不忘憂耶(楽しむの真なる者は, 憂 自から泯くるなり/夫れ楽しむの惟だ真ならざるは斯れ憂の中よりすればなり, 憤 極まりて之を楽しむが若きも, 夫子 憂うなり, 又た云胡ぞ憂を忘れざらんや)

①題目の截除された上文は, 「其爲人也, 發憤忘食(其の人と爲りや, 發憤して食を忘る)」。

[破題上句:] 「樂」字を順破す。[破題下句:] 「忘憂」を破く。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 正轉なり。[承題三句:] 題面を収清す(『童子問路』卷一・十八葉・「承題」条)。

我非生而知之者(『論語』述而)

聖人欲明所以知、而以生知自謝焉。夫夫子固生而知之者、乃猶以之自謝焉、抑何謙哉(聖人「知る」所以を明らかにせんと欲し、生れながらに知るを以て自から謝けり。夫れ夫子は固より「生れながらにして之を知る者」なり、乃ち猶お之を以て自から謝く、抑そも何んぞ謙らんや)

[破題上句:] なし。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十八葉・「承題」条)。

文莫吾猶人也(『論語』述而)

聖人自明所以猶人者、以文之不足貴也。夫文人之所尚也、而夫子曰吾猶人也、不可知文之不足貴哉(聖人「自から「猶お人のごとき」所以を明らかにせんとする者は、文の貴ぶに足らざるを以てなり。夫れ文は人の尚ぶ所なり、而して夫子「吾れ猶お人のごとし」と曰う、文の貴ぶに足らざるを知る可からざるかな)

①『四書集注』論語・述而・「文莫吾猶人也」条の朱注に「猶人、言不能過人、而尚可以及人(猶人とは、人に過ぎる能わず、而して尚お以て人に及ぶ可しを言う)」。

②『四書集注』論語・述而・「文莫吾猶人也」条の朱注に「謝氏曰、文、雖聖人無不與人同、故不遜(謝氏曰く、文は、聖人と雖も人と同じからざる無し、故に遜らず)」。

[破題上句:] 題旨なり。[破題下句:] 題意なり。

[承題一句:] 反承なり。[承題二句:] 正轉なり。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十八葉・「承題」条)。

四十五十(『論語』子罕)

時之不再也、衰微年其漸至矣。夫四十五十、豈不從後生時來哉、然至此則已年衰矣、子能不為後生儆哉(時の再びせざるなり、衰微の年の其れ漸やく至れり。夫れ四十五十、豈に後生に従うの時の來るにあらざらんか、然れども此に至れば則ち已に年衰ゆるなり、子能く後生の為に儆めざるかな)

[破題上句:] 破題上句:] なし。[破題下句:] 貼題なり。

[承題一句:] なし。[承題二句:] 是れ「後生」に對して説く。[承題三句:] 題意を合わす(『童子問路』卷一・十九葉・「承題」条:『増註童子問路』は、「時之不再也、衰年其漸至矣。夫四十五十、孰不從後生時來、然至此則已非復後生矣」とする)。

曾哲後(『論語』先進)

觀賢者之獨後、亦若不與衆俱也。夫異乎三子者、無往不形其異也、即一出之後、不有可見焉者乎(賢者の獨り後るるを觀るに、亦た衆と俱にせざるが若きなり。夫れ三子に異なる者あり、往くとして其の異なるを形にせざる無きなり、即ち一たび出ずるの後、見る可きもの有らざ

るか)

①焉者乎:「焉」字は軽く提し、「者乎」は是れ指す所有りて虚●するの辭なり」(『舉業辨字』歇語辭第七・三十七葉・「焉者乎」条)。

[破題上句:] なし。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十九葉・「承題」条:『増註童子問路』は、「觀賢者之獨後,亦若不與衆俱也/夫異乎三子者,無往不形其異也,即所出之後,不有可見者乎」とする)。

揜其不善而著其善(『大學』傳第六章第二節)

工于欺者為極,擬其揜著之情焉/夫善不善判然也,小人則揜而著,亦自謂術之有獨工耳(欺くに工なる者は極まれりと為すは,其の揜おおいて著あらわすの情かたどを擬ればなり/夫れ善・不善は判然たるなり,小人は則ち揜おおいて著あらわす,亦た自から術の獨り工なるもの有りと謂うのみ)

[破題上句:] 破題旨。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十九葉・「承題」条:『増註童子問路』は、「工于欺者,為極擬其揜著之情焉/夫善不善判然也,揜而著之,亦自謂術之有獨工耳」とする)。

庶民子來(『孟子』梁惠王上)

即民之來而擬之,忘其為公事矣/夫文王視民猶子者也,靈臺之成,如子來焉,不亦宜乎(民の來るに即して之を擬(なぞら)うるに,其の公事為るを忘る/夫れ文王 民を視ること猶お子のごとき者なり,靈臺の成るは,子の如く來れり,亦た宜しからざるや)

[破題上句:] なし。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十九葉・「承題」条)。

至於日至之時皆熟矣(『孟子』告子上)

時至而熟,又可驗其無殊矣/夫時之未至,麥之熟未可必也,日至則皆熟不又足驗其無殊哉(時至りて熟す,又た其の殊ことなり無ためきを驗(驗)す可し/夫れ時の未だ至らざれば,麥の熟するは未だ必ずする可からず,日至れば則ち皆な熟す,又た其の殊ことなり無ためきを驗(驗)すに足らざらんや)

[破題上句:] なし。[破題下句:] なし。

[承題一句:] なし。[承題二句:] なし。[承題三句:] なし(『童子問路』卷一・十九葉・「承題」条)。

